# 『教育雑誌』に見る日本教育関連の記事

呂　　順　長

**要旨**

中国においては、清末から民国初期にかけて教育近代化の推進に伴って教育関連の雑誌が数多く刊行された。各種の教育雑誌に日本教育関連の記事が多く見られ、それらの資料は近代における日中教育交流、特に日本の中国教育近代化に与えた影響の実態を解明するうえで、非常に大事な第一次資料である。筆者はそれらの資料を調査･蒐集し、その整理作業を行っているが、本稿では、その作業の一部として商務印書館刊行の『教育雑誌』（1909－1948）に掲載された日本教育関連の記事を、1909－1911年の3年分のものに限定して文芸欄の教育小説、論文などの翻訳作品、記事欄の日本教育情報、広告欄にみる日本書籍目録などの内容を中心に紹介する。

**キーワード**　教育雑誌　商務印書館　日中教育交流　教育小説　日本書籍の翻訳

## はじめに

中国においては、清末から民国初期にかけて教育近代化を目指す教育改革が推進され、それに伴って教育関連の雑誌が数多く刊行された。それは主に教育官報または教育雑誌というタイトルで見られるが、これまでに筆者が蒐集したものだけでも、『教育世界』（1901年、上海・教育世界社）、『四川学報』（1905年、成都･四川学務処）、『学部官報』（1906年、北京･学部図書局）、『官報』（1906年、東京・遊学生監督処）、『河南教育官報』（1907年、開封・河南学務公所）、『四川教育官報』（1907年、成都･四川学務公所）、『雲南教育官報』（1907年、昆明･雲南学務公所）、『湖南教育官報』（1908年、長沙･湖南学務公所）、『吉林教育官報』（1908年、吉林･吉林学務公所）、『浙江教育官報』（1908年、杭州･浙江学務公所）、『福建教育官報』（1908年、福州･福建提学使署）、『教育雑誌』（1909年、上海･商務印書館）、『甘粛教育官報』（1909年、蘭州･蘭州官報書局）、『貴州教育官報』（1909年、貴陽･貴州学務公所）、『湖北教育官報』（1910年、漢口･湖北提学使司）、『広東教育官報』（1910年、広州･広東学務公所）、『湖南教育雑誌』（1912年、長沙･湖南教育総会）、『教育周報』（1913年、杭州・浙江教育会）などがある。これらの雑誌はほとんど各地の教育行政機関から刊行されたもので、そのうちよく見られる学務公所という機関は、1906年に全国の教育行政を統括する組織「学部」が設置されたことにより、各省にそれぞれ教育行政管理機関として提学使司が設立され、この提学使司の執行機関として設置されたものである。

上記の雑誌のなか、1901年に羅振玉により上海で創刊された『教育世界』は中国最初の教育専門雑誌である。この雑誌は1908年まで7年間にわたり166号まで刊行され、中国近代教育の普及と発展に大きな影響を与えた。また各種の教育官報はいずれも中央または地方の教育行政

機関から刊行されたもので、最初のものは筆者が経眼した限りでは1906年の『学部官報』である。そのうち、1906年に中国人日本留学生を管理する遊学生監督処から刊行された『官報』は海外（東京）での刊行という意味では異色といえよう。そのほかに、教育雑誌と命名されたものはほとんど政府の機関により刊行されたものであるが、なかには『教育雑誌』（1909年、商務印書館）のように民間の組織から刊行されたものもある。さらにその存続期間は雑誌により大きな開きがあり、例えば『甘粛教育官報』は1909年に創刊されてからその翌年に廃刊されるまで７期しか発行されなかったが、それに対して商務印書館の『教育雑誌』は1909年に創刊されてから1948年の停刊まで約40年間も継続していた。

清末民国初期の各種の教育雑誌には日本教育関連の記事が多く掲載され、それらの資料は近代における日中教育交流、特に日本の中国教育近代化に与えた影響の実態を解明するうえで、非常に大事な第一次資料である。近年、筆者はそれらの資料を調査・蒐集し、その整理作業を行っているが、本稿では、その作業の一部として1909－1911年の３年分の商務印書館『教育雑誌』に掲載された日本教育関連の記事を紹介する。

## 一、商務印書館刊行の『教育雑誌』

1897年に夏瑞方ら４人によって上海で設立された商務印書館は、設立初期には商業簿記や広告などの印刷を主に扱っていた小規模の印刷所に過ぎなかったが、1902年以降、小・中学校の教科書の翻訳と刊行により基礎を固め、さらに『東方雑誌』（1904－1948）、『教育雑誌』（1909－1948）、『小説月報』（1910－1932）、『少年雑誌』（1911－1931）などの大型雑誌を次々と創刊させ、世の注目を集め、清末･民国期の中国最大の出版社にまで成長した。

先にも触れたが、1909年に商務印書館の主要事業の一環として『教育雑誌』が創刊され、途中戦争などで一時中断されたことがあるとはいえ、以後1948年に停刊されるまで約40年間も継続し、計382期が刊行され、近代中国において継続時間がもっとも長く、且つ影響がもっとも大きい教育専門雑誌となった。創刊号に掲載された「教育雑誌簡章」[1]によれば、雑誌は「教育を研究し学務を改良するを以て宗旨と為し」、図画・主張・社説・学術・教授管理・教授資料・史伝・教育人物・教育法令・章程文牘・記事・調査・評論・文芸・談話・雑纂・質疑答問・紹介批評・名家著述・付録などの欄が設けられ、月に一回刊行された。設立初期の主編は学制の改革に関心を持ち、特に修業年限の短縮と簡体字の採用を強く主張していた教育者の陸費逵である。彼は商務印書館に入社後の翌年､23歳の若さで『教育雑誌』の編集責任者に抜擢され、『教育雑誌』が創刊されると､いち早くその創刊号に「普通教育当使用俗体字」「短縮在学学年」などの重要な論文を発表し、自らの主張を披露している。陸費逵のあと、歴代編集責任者はそれぞれ朱元善・李石岑・唐鉞・周予同・何炳松・黄覚民・趙廷為・李季開である。

『教育雑誌』は西洋の近代教育思想や各国の教育制度、国内の教育問題、国内外の教育動態、各時期の教育法規、児童教育から社会人教育に至るまでの教育方法、教育関連の人物、教育関

1　『教育雑誌』1909年第１期、上海商務印書館、中国国家図書館蔵。以下、引用する『教育雑誌』はすべて出所が同じなのでいちいち注を出さないことにする。

連の文芸作品などを幅広く掲載している。そのうち、多数含まれる欧米諸国や日本の著者による作品は、原著が日本語以外のものでも日本語から重訳されたものが多く見られ、この傾向は特に時期の早い『教育雑誌』ほど顕著に見られる。それらの翻訳作品を通じて、伝統教育から近代教育に転換しようとする時期に、海外の進んだ教育理念と教育方法の導入に取り組む関係者の姿勢と努力、海外の近代教育が近代中国に与えた影響などが窺える。とりわけ、清末では教育の面においても日本を通じて世界に学ぶという傾向が強く、『教育雑誌』の日本教育関連記事を整理・分析すれば、日本の近代中国教育に与えた影響がいっそう明らかにされることが期待でき、その意味では40年間も続いた『教育雑誌』は近代日中教育交流研究の資料の宝庫とでもいえよう。

『教育雑誌』は欄の種類を問わず海外の教育関係の記事が掲載されているが、日本の記事は初期のものに限って見れば、「文芸」欄の日本語から重訳された教育小説、「教授管理」欄などに載せられた日本人による教育理論や教育方法の論文から翻訳された作品、「記事」欄の日本教育の現状に関する短い情報、「広告」欄の日本語から翻訳・編訳された書籍の目録などがとりわけ目立つ。以下、それぞれその一部を紹介しよう。

## 二、「文芸」欄の教育小説

1909－1911年の『教育雑誌』の「文芸」欄に連載された長編教育小説に『馨児就学記』『孤雛感遇記』『埋石棄石記』があり、いずれも包天笑（署名は天笑生）によって日本語の作品から翻訳されたものである。

1909年第１期と第３－13期の『教育雑誌』に連載された『馨児就学記』はその原著がイタリア人作家のエドモンド・デ・アミーチス（Edmondo De Amicis、1846－1908）によって書かれたCuoreである。この小説はタイトルCuore（イタリア語、心･愛情の意）が示しているように、愛とは何か、友情とは何か、それに答えようとして、主人公の少年・エンリーコの新学期の10月から翌年７月までの１学年の学校生活について日記風に書き綴った物語である。また日記のほかに、主人公の父母や姉がくれた手紙、先生による「毎月のお話」としての少年物語も挿入されている。この作品は1902年に杉谷代水によって『学童日誌』というタイトルで初めて日本語訳され、包天笑が翻訳する際に使った底本はこの杉谷代水訳の『学童日誌』であるとされている[2)]。『孤雛感遇記』についてはいまのところその原著者および翻訳する際に利用された原本が未詳で、今後の調査を待ちたいが、『教育雑誌』1910年の第１－４期、第６－９期と第12期に連載されている。それから1911年第１期、３－４期、６－８期と11－12期に連載された『埋石棄石記』は小泉又一の『棄石』（同文館、1907年）から翻訳されたもので、教師としてどう世に貢献すべきか、国家を富強にするために自らの役割をどう果たすべきか、小説は自らを捨石にする理想の教師像を描き出し、教育者を鼓舞しようとするものである。

---

2　陳宏淑『訳者的操縦―従Cuore到〈馨児就学記〉』、国立台湾師範大学翻訳研究所博士論文、2010年。本節では、ほかに同論文を参考にした箇所があるが、煩雑を避けるためいちいち注をつけないことにする。

以下、訳者の経歴とその日本語能力に触れたうえ、主に小説『馨児就学記』の社会的影響およびその翻訳の特徴について紹介する。

訳者の包天笑（1876－1973）は江蘇省呉県の出身で、本名は包公毅、字は朗孫、天笑は彼の筆名である。彼は中国近現代の文学者として広く知られ、小説を多数創作したほか、外国文学の翻訳やジャーナリズムにも携わるなど、様々な分野で活躍した人物である。彼は日本を含め海外に留学した経験がないが、独学などで英語・日本語・フランス語を勉強したことがある。晩年に執筆した回想録『釧影楼回憶録』によると、彼は本願寺の僧侶が故郷の蘇州で開いた日本語学校に三ヶ月ほど通ったことがあり、その後は主に日本語の文法について独学していた[3)]。ゆえに日本語の本はある程度読めるが、会話能力はほとんどなく、民国初年にジャーナリストの代表団の一員として初めて訪日した際も日本語がまったく話せなかった[4)]。翻訳する日本語作品を選ぶ時はその条件として欧米諸国から日本語訳されたもので、且つその訳文に漢文風の表現が多く和文が少ないものに限定したという。さらに自らの外国語レベルについては、「私の英語は翻訳が出来るという程度にはとても達しておらず、日本語はなんとか翻訳はできるが、和文と土語（仮名表現）の多い文章はやはり理解できない」とも回顧している[5)]。

教育小説は広義では教育的意味を持つ小説を指すが、狭義では主人公が様々な体験を通して内面的に成長していく過程を描く小説のことをいう。中国では、近代の雑誌に初めて「教育小説」という欄が設けられたのは先述の『教育世界』で、1903年にその欄に掲載された『愛美耳鈔』はフランス人哲学者ルソーの『エミール教育論』（Emile ou de l'éducation）がその原著で、日本人の山口小太郎と島崎恆五郎が抄訳した『エミール抄』（明治32年、開発社）を日本人の中島端[6)]が漢訳したものである。しかし、一番多く海外の教育小説を翻訳し当時の中国社会に大きな影響を与えたのは包天笑で、彼は上記の三つの小説だけではなくその後も翻訳を続けた。しかし、彼の翻訳作品のなかで一番よく売れ、大きく注目されたのはやはり『馨児就学記』であった。その原因について、訳者は晩年に次のように回顧している。

> この三冊の小説の発行部数は『馨児就学記』が一番多かった。（中略）その原因としては、一、その本の初出版は庚戌年つまり辛亥革命の前年で、わが国の小学校は大きく発展していた時期であった。二、当時、商務印書館は全国の各省、各大都市に分館を設け、自社から出版された教科書、とりわけ国語の教科書の販売に取り組んでいた。三、この本は感情も表現もともに豊かで、中国のことをテーマにし、伝統の道徳を提唱しているので、十一、二歳の生徒にもっとも適合している。後には多くの学校で生徒が卒業する時の記念

---

3　包天笑著・劉幼生点校『釧影楼回憶録・釧影楼回憶録続編』、三晋出版社、2014年、第115－116頁。

4　前掲『釧影楼回憶録・釧影楼回憶録続編』、第315頁。

5　前掲『釧影楼回憶録・釧影楼回憶録続編』、第128頁。

6　中島端：通称端蔵、号は斗南、1859年に東京に生れ、1930年に没している。漢学者で、明治末期に長く中国に滞在し、羅振玉など多くの中国人漢学者との交流を持つ。著書に『近世外交史』（明治24年）、『支那分割の運命』（大正元年）、『斗南存稿』（昭和7年）などがあり、羅振玉により刊行された『農学報』『教育世界』に訳者としてその名前が見られる。文学社中島敦の伯父にあたる。

品として数百冊単位で贈られ、その定価は一冊たった三角五分であった。ゆえにこの本は絶版となるまで数十万冊は印刷されたはずである[7)]。

『馨児就学記』は『教育雑誌』での連載が終わった後、その翌年に商務印書館から単行本として出版され、その後1926年７月には第８版、1931年10月には第10版、1938年５月には「国難後第４版」と版を重ねていた[8)]。同小説は日本で1902年に初めて杉谷代水によって翻訳され、その後も『愛の学校』（三浦修吾、1912年）、『クオレ　愛の学校』（前田晁訳、1929年）、『クオーレ　愛の学校』（柴田治三郎訳、1971年）など度重なって翻訳されたように、中国でも包天笑の翻訳に続き、『愛的教育』（夏丏尊、1924年）、『愛的学校』（柯蓬洲、1935年）など数多くの版本が現れている。新しい版本が現れてからも包天笑の『馨児就学記』は読み続けられていたのである。

このように、『馨児就学記』が広く人気を博したのは小説のテーマとする友情と愛が人々に感動を与えたことがもちろん大きな理由のひとつであるが、訳者が翻訳する際、小説の人物、地名、場面を中国化させ、さらに一部の内容を書き換えるなどして中国の読者が読みやすいようにいろいろ工夫したこともその大きな理由である。しかし、これは必ずしもすべて訳者の独創ではない。実は包天笑の利用した底本つまり杉谷代水訳の『学童日誌』が原著よりすでに多く省略され、登場人物、地名、場面が日本化されている。包天笑はこの底本に基づいて翻訳する際、それら日本化されたものをさらに中国化し、そのうえ一部の内容を書き換えたのである。それゆえに、『馨児就学記』はいまでも包天笑が自ら書いた小説であるとしばしば誤解される。

要するに、包天笑訳の『馨児就学記』はイタリア人作家アミーチスの作品Cuoreが初めて中国に紹介されたもので、その後版を重ねて出版され大きな反響を呼んだが、その翻訳の過程を見れば日本の影響が大きく、近代中国が西洋文化を取り入れる際に日本が果たした役割はこの一例からも窺える。

### 三、論文などの翻訳作品

雑誌の「社説」欄や、外国の新しい教育上の経験などを翻訳して学校教育の参考にすることを趣旨とする「教授管理」欄に、日本の学術誌などから翻訳された多くの翻訳作品がみられる。例えば、「社説」欄の「不良少年論」、「教授管理」欄の「小学校之模範」「最優等生及劣等生之待遇法」「学校新聞之研究」「小学校運動会改良案」「体操教授之各種問題」「教授時間之区分」「小学校之呼吸運動」「小学校男女児童身心之差別」など、いずれも日本人の論文から訳出されたものである。ここではそのいくつかを紹介する。

1909年第１期から第３期までの「社説」欄に連載された論文「不良少年論」は塚原政次が著した同名の論文から王我臧により訳出されたものである。原文は明治41年３月から６月に至るまで三回にわたって『教育学術界』に発表されている。その内容は序論、不良少年になる先

---

7　前掲『釧影楼回憶録・釧影楼回憶録続編』、第282-283頁。

8　鄭錦懐「『愛的教育』在華版本考録」、『福建師範大学福清分校学報』、2009年第６期、第116頁。

天的原因と後天的原因、不良少年の予防と感化矯正、結論などの部分からなる。序論では、少年犯罪者の社会的危害を説きながら、犯罪者数の増加的傾向を明治33年から明治38年までの懲治場入場者数を取り上げて紹介している。しかもそれは日本だけではなく、たとえば、イタリア、オーストリア、イギリスなどの国々も少年犯罪は同じく深刻化しているという。少年犯罪の原因については、先天的原因すなわち両親の血統上すでに犯罪者の要素を持ついわゆる遺伝的要素と、後天的原因すなわち生まれてから遭遇する種々の境遇とに分けて分析している。特に後天的原因は、少年の年齢・家庭の環境・教育の有無と内容・経済的条件・住所と交友の状況・飲酒の習慣などと深く関係し、これらの原因が種々錯綜しているという。それから不良少年の予防の方策について、託児所や幼児保育院、貧民幼稚園、孤児院または養育院、棄児収容所などの施設を整備させて子供たちが後に健全な心身の発育を成す基礎を得るように関係の各施設に入らせるのは、少年犯罪の予防に大いに効果があるとされている。最後に不良少年の感化と矯正については、当時日本で20歳未満の不良少年が５万６百人余りあるにもかかわらず、実際に感化院と懲治場に入って感化矯正を受けている者はわずか総数の約四十分の一の1400人程度であるという状態を踏まえ、今後施設の増設など不良少年の感化矯正にいっそう力を入れなければならないと論じている。

1909年第３期と第５期の「教授管理」欄に掲載された「最優等生及劣等生之待遇法」は川人直夫の論文「最優等生及劣等生取扱ノ適切ナル方法如何」（『徳島県教育会雑誌』129号、1908年）から王我臧により訳出されたものである。この翻訳論文を掲載するにあたり、雑誌の編集者が、「教授の最も困難な事は生徒の程度の整わないことにすぎない。編入生なら学力に差があっても相応の学級に入れればよいが、もし最初から資質に差が大きければ個別に対応する方法を考えなければならない。今回偶然日本の雑誌からその方法を紹介する論文を見つけ、この問題を解決するのに頗る裨益するところがあると思い、王君に翻訳を頼んだ。ここに載せて我が教育界の参考とする。」[9] という趣旨の説明を冒頭に掲げている。このように当時の中国の学校でも起きている学力の差という問題の解決に資するためにこの翻訳論文が掲載されたわけである。論文は序論、劣等生の取り扱い方法、最優等生の取り扱い方法の三部分からなる。序論では、最優等生と劣等生の性行がまったく異なり、区別して取り扱う重要性などを論じた。劣等生の取り扱いの章では、まず劣等生の原因を先天の遺伝と後天の栄養不良・疾病・畸形・発育不完全・五官障害とし、家庭・学校・社会における取り扱い方法を詳しく紹介し、学校の担当教員はとりわけ愛情を以て慎重に対応しなければならないとも指摘した。最優等生の取り扱いの章でも、優等生の原因を心身上と境遇上の両面から分析した上、教育制度の見直し・特別クラスの設置・天才児と早熟児の区別など取り扱いの方法を詳細に紹介している。

1909年第12、13期の「教授管理」欄に掲載された「小学校之模範－日本横浜市尋常寿小学校施設状況」という文章は、現在その日本語の原文が見付からないが、日本の小学校の管理法を中国の学校の参考にするため学校の校則などがそのまま翻訳されたものと思われる。同小学校

9　『教育雑誌』1909年第３期、第11頁。

は横浜市中区翁町４丁目132号に位置するもので、松本洋幸の講演要旨[10]によれば、関東大震災当時の児童数が1975名もあり、明治期においても横浜のかなり大規模で且つ重要な小学校の一つであったことがわかる。訳文を見ると、その内容は校務事項、統一機関事項、職員自製の教授用具及び器具標本等事項など10項目から構成され、たとえば校務事項では校長及び学校の各課の責務、統一機関事項では職員会、実地授業批評会、教科研究会などの活動内容及び会則などがそれぞれ紹介されている。

ちなみに以上に紹介した訳文の翻訳者は「小学校之模範」の訳者が分からないほか、残りの二篇はいずれも王我臧である。彼は福建省侯官（福州）の出身で早稲田大学留学の経歴を持ち、帰国後商務印書館編訳所に勤務し、主に日本語図書資料の翻訳を担当した。主な訳書に『新訳日本法規大全』(商務印書館1907年版)、『経済学各論』（塩谷廉・坂口直馬著、金華堂1906年版、商務印書館1910年版）、『漢訳日本法律経済辞典』（田辺慶弥著、宝文館1902年版、商務印書館1909年版）、『議員必携』（小原新三著、博文館1903年版）などがある。

## 四、「記事」欄の日本教育情報

『教育雑誌』のなかで日本教育情報がもっとも多く載せられているのは「記事」欄である。いずれも短い記事であるが、内容はさまざまで当時の日本教育の最新情報として注目に値する。その一部を次に紹介する。

まず日本の学校教育の現状に関する記事を幾つか見てみよう。「日本帝国大学卒業生数」（1909年第２期）では明治９年から同41年までの帝国大学の卒業生数が計8501人で法科・医科・工科・文科・理科・農科の学生数も内訳としてそれぞれ紹介されている。「日本東京学生総数」（1910年第３期）では、官立学校・府立学校・私立高等女学校・私立甲種実業学校・市立乙種実業学校・市立専門学校・市立実業補習学校の男女学生数と外国人学生数を紹介し、総数99813人のうち、地方から来た学生は約57000人を占め、そこから日本の教育普及の程度が窺える。「早稲田大学添設校外教育部」（1910年第６期）では、早稲田大学が明治43年に校外教育部を設置し、校外の人々にその講義を公開することを紹介し、併せてその開会式の様子、高田早苗学長と大隈重信総長の挨拶なども紹介した。「日本大学院新入学」（1909年第１期）では、東京帝国大学に新たに入学した８名の大学院生の名前と研究テーマを紹介し、「唐宋風俗史」「東洋殖産工芸史」というテーマに関しては、わが国もこのような研究をする人がいるだろうかと感慨を発している。

次に学制改革と教科書編纂に関する記事に触れておく。「日本擬改学制」（1910年第５期）では、日本政府が旧制中学校５年制を４年制に改めようとし教育関係者を中心に議論を始めていることを紹介している。「日本発行教科書総数」（1910年第５期）では、文部省の統計を引用して1909年度日本全国で発行された修身・国文などすべての教科の教科書数をそれぞれ紹介し、その数の多さにより日本の学校の普及度が高いと指摘している。「日本編纂教科書之新方針」（1909

10　松本洋幸「関東大震災と小学校―横浜市南吉田第二尋常小学校と寿小学校を中心に―」、歴史地震研究会、『歴史地震』第28号、2013年。

年第５期）では、文部省が教科書審議会を開き、修身・歴史・国語などの教科書の編纂方針を決めようとし、例えば歴史では国体の大要に基づき国民の志操の涵養を目標とし、修身では教育勅語の趣旨を貫徹し童話・寓言なども採用すると紹介している。

そして中国人日本留学留学生の現状に関しても多くの記事が見られる。「留学日本学生之減少」（1909年第２期）では、中国人日本留学生の数が毎年減少傾向にあり、現在の留学生数は公費と私費を合せて三千人あまりしかなく、とりわけ高等学校と高等専門学校に入学することは入学定員制限があるので非常に難しいと紹介している。「留東学生断跡於聯隊矣」（1909年第６期）では、陸軍省所属の士官学校が見習士官として中国人留学生を受け入れていたが、在籍中の学生胡学紳が軍用図書を盗んだという事件の影響で今後留学生を受け入れないことになったという。

そのほかに、日本の官公立と市立図書館の設立状況と利用者数及び蔵書状況（「日本図書館之盛況」、1910年第４期）、明治44年に大阪で開催された児童博覧会の様子（「日本児童博覧会」、1911年第２期）、アジアへの植民地経営の教育を宗旨とする殖民学校設立の動き（「殖民学校」1910年第5期）、日本帝国教育会が植民地の朝鮮に対して日本語の普及を急務とする方針を打ち出していること（「日本対於朝鮮之教育方針」1910年第10期）、華族で旧茂木藩主細川子爵の長女が富貴よりも人格を重んじ貧民出身の小学教員と結婚すること（「女公主嫁與小学校長」、1909年第６期）など、内容が多岐に渉っている。

## 五、広告欄にみる日本書籍目録

商務印書館が『教育雑誌』を創刊したのは自社出版の教科書を宣伝するという目的もあったようである。たとえば、長年商務印書館の編集を務めていた章錫琛は、『教育雑誌』は教育学術を議論するという名を持ちながら、実際は教科書を推し広める道具として使われ、雑誌を通じて各学校に連絡したりしたと述べている[11)]。また同じく商務印書館の編集を務めた胡愈之もその回顧録の中に、『教育雑誌』の刊行目的は自社出版の書籍の宣伝のためで、とりわけ教科書の広告を載せるためであると記している[12)]。このような背景の下に、『教育雑誌』には商務印書館から出版された図書の広告が大量に掲載されていた。

『教育雑誌』に載せられた書籍の広告の形もさまざまで、ここではそれをいちいち紹介しないが、もっとも分かりやすい形は一部の雑誌の最後に掲載された「商務印書館書目」というもので、著者または翻訳者などの署名は一部抜けているものの、それを通じて商務印書館から出された主な図書が確認できる。以下、『教育雑誌』1909年第13期の最後の「商務印書館書目」に基づき、明らかに日本語から翻訳されたと確認できるものだけを次に整理しておく。

各科教授法精義　盛岡常蔵著、白作霖編訳

---

11　章錫琛「漫談商務印書館」、『1897－1987　商務印書館九十年―我和商務印書館』、商務印書館、1987年、第114頁。

12　胡愈之『我的回憶』、江蘇人民出版社、1990年。

体操教科書　川瀬元九郎・手島儀太郎著、黄元吉訳
筆算教本　沢田吾一著、崔朝慶訳
鉛筆画範本　村井熊之輔絵
倫理学教科書　服部宇之吉原著
東洋史要　桑原隲蔵原著、金為重訳
万国史綱　家永豊吉・元良勇次郎著、邵希雍訳
動物学新教科書　箕作佳吉著、王季烈訳
新式鉱物学　脅水鉄五郎著、金観誥訳
新編中学初等三角法教科書　飯島正之樹著、周藩訳
読書法　柳沢政太郎著
小学教授法要義　木村忠治郎著
新説教授学　槙山栄次著
物理学　飯田盛造著、厳保誠訳
商業簿記教科書　佐野善作著、汪廷襄訳
漢訳法制経済通論　戸水寛人等著、余士英等訳編
早稲田大学政法理財科講義
漢訳日本法規大全
漢訳日本六法全書
漢訳日本法制要旨　工藤重義著、陸輔訳
漢訳日本明治法制史　清浦圭吾著
漢訳比較国法学　末岡精一著
漢訳国法学　筧克彦著
漢訳法学通論　織田万著　劉崇佑訳
漢訳民法原論　富井政章著、陳海瀛・陳海超訳
漢訳政治学　小野塚喜平次著
政治汎論　高田早苗原著
欧米政体通覧　上野貞吉著
漢訳憲政論　菊池学而著、林棨訳
憲法研究書　富岡康郎著、呉興讓・孟森訳訂
漢訳日本憲法義解　伊藤博文纂
漢訳日本議会法規
漢訳議会記事　蔡文森・王我臧訳
漢訳日本議会必携　小原新三著、王我臧訳
漢訳自治論　日本独逸学協会著、謝氷訳
漢訳欧米教育実際　小泉又一著
支那教育史略　狩野良知著
日本明治学制沿革史

徳国学校制度　加藤駒二著
漢訳国債論　土子金四郎著、王季点訳
理財学精義　田尻稲次郎著、王季点訳
漢訳統計通論　横山雅男著
法律経済辞典　田辺慶弥著、王我臧訳

上記のリストから見ると、政治や法律関係の訳書が目立ち、学校の教科書はそれほど多くないように見えるが、これは多くの教科書に著者などの情報が載っておらず、確認できなかったからである。実際、初期の商務印書館から出された翻訳書または編訳書のなかでもっとも多いのは学校の教科書だったはずである。初期の商務印書館は日本留学帰りの翻訳職員を多数抱え、さらに日本の金港堂と協力し日本人の長尾槙太郎（漢学者・元高等師範学校教授）、加藤駒二（金港堂社員）、小谷重（元文部省図書審査官兼視学官）などを顧問として招聘し[13]、小学校の教科書の刊行に力を注いでいた。例えば、前述「商務印書館書目」にも載っている『最新国文教科書』[14]（第１－10冊）は編集者として高鳳謙・張元済・蒋維喬・荘兪の四人の名前が載っているが、ほかの情報は同「書目」には一切ない。しかし、実はこの教科書の編集に長尾槙太郎ら日本人顧問も参加し、彼らの提案が採用されたはずである。清末民国初期に日本語からの翻訳書が大量に出版されたという事実をこの『教育雑誌』の図書広告からも再確認できる。

**終わりに**

『教育雑誌』には以上触れたもの以外に日本教育関係の情報が、本稿が設定した最初三年間のものだけでも、たとえば、アメリカと日本の教育制度の比較（国分柏州原著、蔡文森訳、1911年第２期、「調査」欄）、日本の小学校での理科実験時の撮影（1909年第８期、「図画」欄）、井上哲次郎が示した学生としての座右の銘（1909年第７期 、「雑纂」欄）、女子教育家懇話会が発表した若い婦人の男子に接する心得（1909年第６期、「雑纂」欄）など、紹介しきれないほど数多く含まれている。末尾に付録として三年間の記事の目録を掲げておくが、各種の教育関連の雑誌に含まれる日本教育関連の資料が近代日中教育交流の歴史の研究にとってどれほど貴重な資料か再認識され、もっと多くの研究者に利用されるよう、本稿がその一助となれば幸いである。

---

13　鄭貞文「我所知道的商務印書館編訳所」、前掲『1897－1987　商務印書館九十年―我和商務印書館』、第203頁。

14　『最新国文教科書』の出版経緯などについては、樽本照雄「初期商務印書館における教科書の系譜―『最新国文教科書』第１冊まで―」（『大阪経大論集』第53巻第４号、2002年11月）に詳しく紹介されている。

---

**付録**：『教育雑誌』1909－1911年日本教育関連記事目録

**図画**

日本小学校学生理科実験攝影 1909年第８期
日本小学校学生習字時攝影 1909年第８期
日本尋常小学六年級実験観察台教授時攝影 1910年第12期
日本東京盲学校新校舎攝影 1911年第１期
日本小学生雪中通学之景 19011年第10期

**社説**

不良少年論 日本塚原政次著 王我臧訳 1909年第１-３期
論宜撙節教育費以推広教育 沈頤 1910年第４期
論各国 教科書制度 陸費逵 1910年第６期

**論説**

日本人之我国教育観 1910年第１期

**教育法令**

学部奏禁遊学生與外国人結婚 1910年第４期
学部新定管理日本遊学生監督処章程 1911年第４期
学部奏遊学日本高等五校予備学堂章程折 1911年第６期

**教育行政**

未成年者飲酒之禁 1910年第８期

**章程文牘**

日本文部省検定教員章程 1909年第４期

**調査**

日本教育界最近之調査 1909年第１期
日本経営関東学堂調査記 陶履恭訳 1909年第９期
教育可以滅人国（日本選定韓国教科書之方針）1909年第９期
徳美日三国最大都市之教育 1910年第９期
丹麦之補習教育 日本法学博士矢作栄藏講演 1910年第３期
欧美図書館之制度 日本服部教一著 蔡文森 1910年第５期
日本明治四十二年全国学校之狀況 1910年第２期
足見一班 1910年第11期
美日教育制度之比較 日本国分柏州原著 蔡文森訳 1911年第２期

**教授資料**

日儒佐久間象山格言 1910年第９期

**学術**

教育与疲労之関係 日本勝又鄞次郎撰 蔡文森訳述 1910年第12期

**教授管理**

最優等生及劣等生之待遇法 日本川人直夫著　王我臧訳 1909年第３、５期
小学校之模範（日本横浜市尋常壽小学校施設狀況）1909年第12、13期
学校新聞之研究 1910年第８期
小学校運動会改良案 日本福岡県教育支会研究部 蔡文森 1910年第８期
体操教授之各種問題 訳日本教育雑誌 蔡文森 1910年第９期
教授時間之区分 日本塩見静一著 蔡文森訳述 1910年第10期
小学校之呼吸運動 蔡文森訳述 1910年第11期
小学校男女児童身心之差別 日本伊藤米次郎原著 蔡文森 1910年第12期

**教材**

小学理化器械製造実験之簡法 日本中島吉太郎著 蔡文森訳述 1911年第１－５期

**記事**

駐日公使注意留学生考試 1909年第１期
日本大学院新入学 1909年第１期
日本之留学生帰国 1909年第２期
日本帝国大学卒業生数 1909年第２期
留学日本学生之減少 1909年第２期
中国学生分班教授 1909年第２期
東京留学界之現状 1909年第３期
日本編纂教科書之新方針 1909年第５期
廷試留学生掲暁記詳 1909年第６期
新学年与教科書 1909年第６期
子爵女公主嫁与小学校長 1909年第６期
留東学生断跡於聯隊矣 1909年第６期
胡学紳被禁六年 1909年第６期
医学校定学士称号 1909年第７期
外国文学博士賞給中国文科進士 1909年第８期
咨派官紳赴日聴講憲政 1909年第12期
留学界近事 1909年第12期
鄂学司呈報洋教員名表 1909年第13期
日人来京留学 1909年第13期
日人創設漢学研究会 1909年第13期
山東学生考入高等之難 1909年第13期
白鳥博士之好古 1909年第13期
在東学生之侮辱 1910年第２期
留東学生減少 1910年第２期
憲兵畢業生 1910年第２期

日人教育一斑 1910年第２期
日本東京学生総数 1910年第３期
憲兵学生畢業 1910年第３期
留日高等師範生畢業 1910年第３期
日本図書館之盛況 1910年第４期
留日海軍学生之紀念 1910年第４期
留学岩倉鉄道畢業 1910年第４期
日本擬改学制 1910年第５期
日本発行教科書総数 1910年第５期
殖民学校 1910年第５期
早稲田大学添設校外教育部 1910年第６期
日本留学界之敗類 1910年第６期
日本在満洲之教育 1910年第７期
日本陸軍士官学校畢業 1910年第7期
最近日本留学生之調査 1910年第7期
日本東邦協会特設清国学術調査部 1910年第８期
日本留学生会館之近況 1910年第８期
直隷派人赴日調査学務 1910年第９期
留学日本海軍学生之成績 1910年第９期
東亜同文館学生起程来華 1910年第９期
日本東京盲学校新築落成 1910年第10期
日本大競走会 1910年第10期
日本対於朝鮮之教育方針 1910年第10期
日美学生野球競争 1910年第11期
日本文部省中学制度改良案 1910年第12期
日本児童博覧会 1911年第２期
記留東海軍砲術学生畢業事 1911年第７期
日本改定中学校学制 1911年第９期
留日学生之近況 1911年第12期

**文芸**

馨児就学記 天笑生 1909年第１、３－13期
孤雛感遇記 天笑生 1910年第１－４、６－９、12期
埋石棄石記 天笑生 1911年第１、３－４、６－８、11－12期

**雑纂**

日俄戦争与日本修身教育 1909年第１期
日本教員尽力於社会教化之事例 1909年第５期
児童感化 日本某 1909年第５期
青年女子対於男子之心得 1909年第６期
学生座右銘 井上哲次郎 1909年第７期
日本大学教員之生活難 1909年第７期

独学自修者之成績 1909年第９期
日本商科大学之内容 1909年第９期
出博士学士之小学堂 1909年第９期
日本全国教育費 1909年第13期
記中村盧舟君演催眠述 1910年第８期
日本女教員旷課之調査 1910年第８期
日本芸妓学堂 1910年第８期 雑纂
日本東西両京之比較 王桐齢選録 1910年第12期

**付録**

日本中学校令施行規則 1911年第９期
日本新発布之朝鮮教育令 1911年第９期
日本高等中学校令 1911年第10期
日本高等中学校規程 1911年第10期

本稿は科研「清末民国初期の中国の教育雑誌から見た日本近代教育の中国への影響」（基盤研究（C）代表者名 呂順長　2012年～ 2016年　課題番号24520818 ）の成果の一部である。